

平成 21 年
3 月 26 日

病害虫発生予報 4 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目 次 >

．今月の予報

【注意すべき病害虫】

麦類：赤かび病	1
ナシ：黒星病	1
イチゴ：ハダニ類	2
促成キュウリ：褐斑病	2
施設野菜（トマト，イチゴ，キュウリ，ピーマン）：灰色かび病	3
促成トマト：トマト黄化葉巻病	3

【その他の病害虫】	4
麦類，果樹共通，イチゴ，促成・半促成ピーマン，促成トマト，促成キュウリ メロン，春ハクサイ，春レタス	

．病害虫ミニ情報

麦類の赤かび病防除対策について	6
水稻の育苗箱施薬について	7

．今月の気象予報

．テレホンサービス

029(226)5321

本文に記載された農薬の登録内容は，平成 21 年 3 月 18 日現在のものです。

農薬登録速報については，農林水産省ホームページ「農薬コーナー」
<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html> 内の登録速報を参照してください。

詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

・今月の予報
【注意すべき病害虫】

麦類

1. 赤かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	-	県下全域

[予報の根拠]

農研速報（平成 21 年 3 月 16 日，19 日発表）の麦の生育状況によると，出穂期は平年よりやや早いと予想される。

[防除上注意すべき事項]

麦の開花から 10 日程度の間が最も感染しやすく，この時期に降雨が続き気温が高くなると発生が多くなるので，気象条件に注意する。防除対策は病害虫ミニ情報（P6）を参照する。

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	多い	県下全域

[予報の根拠]

ナシの開花は平年よりやや早いと予想されるため，果そう基部での発生時期もやや早いと予想される。

昨年 10 月中旬の調査で，ナシ黒星病秋型病斑の発病度及び発生地点率は過去 7 年間と比べて高く，また秋季の落葉前に降雨があったことから，ナシ黒星病菌の越冬量は平年より多いと予想される。

[防除上注意すべき事項]

りん片，芽基部の病斑は葉や果実への伝染源となるため，見つけ次第除去し，土中深く埋めるなど適切に処分する。

催芽期～落花期の防除は，黒星病を防除する上で重要であるので，ナシの生育に合わせて必ず実施する。特に，開花直前～開花始めの防除と，落花期の防除は間隔が開きすぎないように注意する。

S・S の散布圧・風圧は適正に設定する。縦横の井桁走行等を行い，できるだけ散布ムラを少なくする。散布後はかかり具合を確認する。

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

3月下旬現在，被害葉率，発生地点率ともに平年よりやや高い。

気象予報によると，向こう1か月の気温は平年並と予想され，特に発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

発生が多くなると防除が困難になるため，初期防除を徹底する。

薬剤散布にあたっては，下葉を取り除き，葉裏や葉柄にもよく付着するよう十分な量で丁寧に散布する。また使用回数，収穫前日数にも十分注意する。

薬剤抵抗性ハダニ類の出現を防ぐため，同一薬剤の連用はさける。

促成キュウリ

1. 褐斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

3月下旬現在，被害葉率は平年より高く，発生地点率は平年よりやや高い。

気象予報によると，向こう1か月の降水量は平年並か少なく，日照時間は多いと予想され，発生をやや抑制する条件である。

[防除上注意すべき事項]

ハウス内が多湿になると発生が助長されるので，換気，送風，暖房等によりハウス内の湿度を低く保つ。

品種間で発病差が大きい。罹病性品種は発生が多くなると防除が困難になるため，発生の少ないうちに防除を徹底する。

新たな伝染源とならないよう，病斑部は取り除いてハウス外に持ち出し処分する。

薬剤は，十分な量で丁寧に散布する。また，耐性菌の出現を防ぐため，系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

施設野菜（トマト、イチゴ、キュウリ、ピーマン）

1. 灰色かび病

[予報内容]

作物名	発生時期	発 生 量	発生地域
トマト、イチゴ	-	やや多い~多い	県下全域
キュウリ	-	平年並~やや多い	
ピーマン	-	平年並	鹿行地域

[予報の根拠]

3月下旬現在、発生量はトマト、イチゴで平年より多く、キュウリでやや多い。ピーマンでは平年並である。

気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は多いと予想され、発生をやや抑制する条件である。

[防除上注意すべき事項]

ハウス内が多湿になると発生が助長されるので、換気、送風、暖房等によりハウス内の湿度を低く保つ。

花落ちが悪い花卉や発病部位は早急に取り除き、ハウス外に持ち出して処分する。

発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。

薬剤散布は、薬液が乾きやすい晴れた日の日中に行う。また、曇雨天が続く薬液が乾きにくい場合は、くん煙剤を利用する。

薬剤は、十分な量で丁寧に散布する。また、耐性菌の出現を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

促成トマトの黄化葉巻病について

[現在の状況]

3月下旬現在、発生ほ場を確認した。

今後気温の上昇にともない、本病を媒介するタバココナジラミの活動が活発となり、発生量の増加等が懸念される。

[防除対策]

発病が認められた株は、感染源となるため早期に抜き取り処分する。

黄色粘着板を設置し、ウイルス媒介虫タバココナジラミの発生推移をよく観察する。

薬剤散布にあたって、タバココナジラミは葉裏に寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

雑草はタバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。

防虫ネットの設置は防除対策として重要であるため、設置していない場合は次作の対応として、ハウスの開口部に防虫ネット（0.4mm目合い以下）を設置し、タバココナジラミのハウスへの出入りを防止する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
麦類	縞萎縮病類	発生量： -	3月下旬現在，小麦，六条大麦は平年並，二条大麦は平年より多い発生である。
果樹共通	果樹カメムシ類	越冬量：平年並 ～やや多い	チャバネアオカメムシの越冬量は，平年並～やや多かった。果樹園への飛来時期は7月以降と予想される。今後の情報に留意する。
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。果実及び果梗の発生に注意する。
	アブラムシ類	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。
	コナジラミ類		
促成・半促成 ピーマン	斑点病	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並～やや多い発生である。向こう1か月の降水量は平年並か少なく，日照時間は多いと予想され，発生をやや抑制する条件である
	うどんこ病	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。
	タバココナジラミ		
	アザミウマ類		
促成トマト	タバココナジラミ	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
促成キュウリ	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや多い	3月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	菌核病	発生量：平年並 ～やや多い	3月下旬現在，やや多い発生である。向こう1か月の天気は降水量が平年並か少なく，日照時間も多いと予想されることから，発生をやや抑制する条件である。
	褐斑病		
メロン	べと病	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。
	つる枯病		
	菌核病		
春ハクサイ	べと病	発生量：やや多い ～多い	3月下旬現在，平年より多い発生である。 トンネル内が多湿にならないよう日中は換気を十分に行う。
春レタス	灰色かび病	発生量：やや多い ～多い	3月下旬現在，平年より多い発生である。 トンネル内が多湿にならないよう日中は換気を十分に行う。
	べと病	発生量：やや多い	3月下旬現在，平年よりやや多い～多い発生である。トンネル内が多湿にならないよう日中は換気を十分に行う。
	菌核病		
	腐敗病	発生量：平年並 ～やや多い	3月下旬現在，平年よりやや多い発生である。トンネル内が多湿にならないよう日中は換気を十分に行う。

麦類の赤かび病防除対策について

赤かび病は、麦の収量や品質を低下させる大きな原因となります。また、本病原菌はデオキシニバレノール（DON）等のかび毒を産生するため、農産物検査規格における赤かび粒混入率の許容値は0.0%と厳しく設定されています。

本病原菌は、麦の開花から10日程度の間が最も感染しやすく、この期間に降雨が続き、気温が20以上になると発生が多くなります。

本年も、今後の気象や麦の生育状況などに注意するとともに、表1を参考に必ず防除を実施してください。なお、本病に対する薬剤防除の適期は、小麦、六条大麦では開花期、二条大麦では穂揃い10日後頃です。出穂期予測などの情報をもとに防除計画をたて、効果的な薬剤防除を行うことが重要です。また、発病の好適条件が続く場合などは、1回目の散布後7～10日に2回目の散布を行います。ただし、薬剤によっては出穂後1回しか使用できないものもあるので注意してください。

なお、「麦類のデオキシニバレノール・ニバレノール汚染低減のための指針（平成20年12月17日農水省公表）」をご参考下さい。

表1 赤かび病に登録のある主な薬剤（平成21年3月18日現在）

薬剤名	希釈倍数	収穫前日数 -本剤の使用回数	対象 作物	有効成分
トップジンM水和剤	1,000～1,500倍	14-3(出穂期以降 は2)	小麦	チオファネートメチル
		30-3(出穂期以降 は1)	麦類 (小麦を除く)	
トップジンMゾル	8倍(無人ヘリ散布)	14-3(出穂期以降 は2)	小麦	
		21-3(出穂期以降 は1)	麦類 (小麦を除く)	
ベルコート水和剤	1,000～2,000倍	21-3(出穂期以降 は1)	小麦	イミノクタジン
ベフラン液剤25	1,000～2,000倍	14-3(出穂期以降 は1)	小麦	イミノクタジン
シルバキュアフロアブル	2,000倍	7-2	小麦	テブコナゾール
チルト乳剤25	1,000～2,000倍	3-3	小麦	プロピコナゾール
	8倍(無人ヘリ散布)	7-3		
	1,000～2,000倍	21-1	大麦	
コロナフロアブル	400倍	- -5	麦類	硫黄
ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍	14-3	麦類	クレソキシムメチル

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認のうえ、周辺作物への飛散に留意して使用してください。

水稻の育苗箱施薬について

育苗箱施薬は本田での散布に比べて作業が簡便で省力的です。しかし病害虫が発生する前に薬剤を施用するため、対象とする病害虫が発生しなかった場合は結果的に過剰な防除となります。また、効果の持続時間が長く対象病害虫が多い薬剤は高価です。過去の病害虫の発生状況を十分に考慮したうえで適切な薬剤を選択してください。

薬剤の選択

育苗箱施薬は、イネミズゾウムシなど水稻の生育初期に発生する害虫や、いもち病を防除できます。薬剤を選択する際は、下表および農作物病害虫雑草防除指針等を参考に、病害虫の発生状況にあわせて薬剤を選択してください。播種時や緑化期に施用できる薬剤もあり、作業体系に応じて選ぶこともできます。

表1 おもな対象病害虫と薬剤の使用例（平成21年3月18日現在）

対象病害虫	薬剤の使用例（農作物病害虫雑草防除指針より）
いもち病	デラウス粒剤，デジタルコラトップ箱粒剤，フジワン粒剤，オリゼメート粒剤，ウィン箱粒剤
いもち病＋紋枯病＋イネミズゾウムシ＋イネドロオイムシ	嵐ダントツ箱粒剤，嵐プリンス箱粒剤6，ウィンアドマイヤーグレータム箱粒剤
いもち病＋イネミズゾウムシ＋イネドロオイムシ	ジャッジ箱粒剤，Dr.オリゼプリンス粒剤6，デラウスプリンス粒剤06，フジワンプリンス粒剤，ウィンアドマイヤー箱粒剤
イネミズゾウムシ＋イネドロオイムシ	アドマイヤー箱粒剤，オンコル粒剤5，ガゼット粒剤，プリンス粒剤，パダン粒剤4

使用時の注意点

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項を確認のうえ使用してください。

田植え前に散布する場合は、葉が濡れていると薬害を生じやすいので、苗の露を払ってから、専用の計量箱か散布器を用いて所定量の薬剤を均一に散布してください。その後、葉に付着した薬剤を払い落とし、さらに軽く散水して薬剤を全部育苗土表面に落ち着かせてください。

播種前に使用する場合は、床土に均一に混和します。なお、余った床土は河川や水路に捨てずに適正に処理してください。

薬剤を処理した場所で野菜等農作物を栽培すると、後作に薬害が発生したり、意図しない農薬が吸収される可能性があります。薬剤の処理およびその後の育苗管理は、他の農作物を栽培する場所では行わないでください。

おもな病害虫の防除のポイント

育苗箱施薬をしても、病害虫の発生期間が長期化したり多発生した場合には、追加防除が必要となることもあります。病害虫の発生状況に十分留意しながら、育苗箱施薬だけでなく、適正な施肥や中干しなどを行って、イネの健全な生育を心がけるとともに、病害虫の生理・生態を踏まえた抑制手段を取り入れ、総合的に病害虫を管理することが大切です。

- ・イネミズゾウムシ：湛水状態は成虫・幼虫の活動に適するため、中干し・間断灌がいなど適正な水管理に努める。
- ・イネドロオイムシ：田植え後1か月程度経過してからが加害のピークとなるため、効果の持続期間が長い薬剤が適している。
- ・いもち病：過剰な窒素施用は、いもち病の発生を助長するので、適正な施肥を行う。
- ・紋枯病：越冬した菌核が代かき時に水面に浮上し、イネの株元に付着して伝染源となる。代かき時に水尻や畦畔沿いの浮遊物は除去する。

同じ薬剤を繰り返し育苗箱施薬していると、病害虫が抵抗性や耐性を獲得して防除効果が低下することがあります。この場合には異なる系統の薬剤を使用してください。また、本田防除を実施する場合には育苗箱施薬とは異なる系統の薬剤を使用してください。

・今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 3月21日から4月20日)

気象庁(3月20日 発表)

< 向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率(%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	40	30
降水量	関東甲信全域	40	40	20
日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の降水量は平年並または少ない確率ともに40%です。

< 1週目の予報 > 3月21日(土曜日)から3月27日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率50%

< 2週目の予報 > 3月28日(土曜日)から4月3日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率ともに40%

< 3週目から4週目の予報 > 4月4日(土曜日)から4月17日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率40%

・テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号：029(226)5321

4月上旬 ナシ病害虫の防除及び麦類の赤かび病対策について

4月下旬 麦類の赤かび病と果樹の病害虫防除について

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。